

戦国の道コースには、こんなにすてきな見所があります。あなたはどこに行ってみます？

### 歴史に守られてきたアーティストの競演

#### 1 鶺鴒

長良川の鶺鴒は古典漁法を今に伝える岐阜市の夏の風物詩。その歴史は古く、1,300年以上前までさかのぼることができる。織田信長は鶺鴒を保護し、「鶺鴒」という名称も信長が付けたという説もある。江戸時代は、徳川家も鶺鴒を見物し、尾張徳川氏は鮎を将軍家に献上するため、長良川の鶺鴒を保護し漁業者に「鶺鴒」の名を許していた。伊集・松尾芭蕉も「おもしろうて やがて悲しき 鶺鴒かな」という有名な句を残した。また、昭和11年と昭和36年の2度にわたり、チャップリンも見物のために来岐。鶺鴒をアーティストと賞賛し「ワンダフル」を連発したといわれている。鶺鴒は鶺鴒が10〜12羽の鶺鴒を見事な手廻さばきで操り、鶺鴒が捕る日本の伝統漁法の1つ。毎日を鶺鴒とともに暮らす鶺鴒匠は代々世襲制で、常口頃から鶺鴒と一緒に生活しているため、鶺鴒と鶺鴒は呼吸の合った動きを見せ、見事に鮎を捕らえてくる。暗闇に落ちた水面にかり火を焚いた鶺鴒舟がゆっくりと現れ、鶺鴒が捕らえる様子を眺める事ができる。目の前で、勇壮な歴史絵巻が繰り広げられ、幽玄の世界へと誘う。鶺鴒観覧船はもちろん、右岸に整備されたプロムナードからも楽しむことができる。

### 齋藤齋宮屋敷の跡？

#### 2 真光寺

建立年などは不明だが、少なくとも承応3年(1654)の「岐阜町絵図」には記載が見られる。齋藤齋宮屋敷跡とされている。真宗大谷派。旧明屋敷村は、住居群が散在した珍しい形態だったが、真光寺もその一部となっていた。この寺に行くには、寺の東側からの狭い通路を西向きに数十m入る。この通路の奥に寺が見えるが、その入り口に寺院名の小さな表札があり、真光寺だと確認できる。

### 道三が遷宮

#### 3 伊奈波神社

1900年以上前の景行天皇の頃、椿原の地(現在の金華山の丸山)に鎮斎したのがこの神社の始まりとされる。御祭神は、天皇の第一皇子の五十瓊敷入彦命(いにしきひりひこのみこと)である。その後、天文8年(1539)に齋藤秀龍(後の道三)が稲葉山(金華山)に入城する際に、現在の伊奈波通に遷したといわれる(神勲が定下になってしまったことを申し訳なく思ったとされる)。昭和14年(1939)には、国幣小社となった。金町の金神社の祭神である淨賢斗媛命(ぬのしひめのみこと)は五十瓊敷入彦命の妃、若宮町の榊森神社の祭神が市牟碓命(いちはやのおのみこと)が五十瓊敷入彦命の子ども、という関係にある。

### 堀跡だけが面影を伝える奉行所跡

#### 4 岐阜町奉行所跡

元禄8年(1695)に、岐阜町奉行所が開かれ、岐阜の統治や長良川の水運の管理を行なった。ここには手代屋敷・同心屋敷・道場などもあった。徳川家康は、慶長5年(1600)の関ヶ原の合戦に勝ち、それまで支配していた美濃を統治した。その際、岐阜町は幕府の直轄領、その他に加納藩、30ほかの旗本領などに分割して統治した。岐阜町が尾張藩領となったのはその後であり、町民の要望もあって奉行所を設けたといわれる。享保2年(1717)8月、尾張藩の豊前藩だった朝日文左衛門が量の検分等で岐阜に出張した際も、この奉行所に立ち寄っている。

### 岐阜市には珍しい卯建

#### 5 卯建(今町)

岐阜市内では、卯建のある家は数軒しか残っていないという。今町のこの家屋は、現在は企業の事務所として活用されている。卯建は、元々は火災の延焼を防ぐための設備である。出せできないこと等を「卯建が上からない」というのは、この卯建を家につくれないほどさえないからという説と、棟上のことを昔は「枿を上げる」と言い、お金持ちでないと家を建てられない、という説とがある。

### 武家屋敷を分ける堀

#### 6 梶川堀

織田信長は、永禄10年(1567)、稲葉山城(後の岐阜城)主となり、当時の井の口(後に信長が岐阜と改名)に本拠地を移し、すぐに城下の整備を始めた。この梶川堀から東側には武家屋敷、西側には町屋を配置した。慶長5年(1600)以降、梶川堀より東側の地区は、古屋敷村となった。「梶川」とは、信長の臣下だった「梶川高盛」の屋敷が、堀の近く(現在の常生寺内)にあったことに由来するとされる。現在は、開渠になっている部分も少なく、また堀が狭いため、あまり人々の目に触れることなく、静かに流れている。

### いざ、山頂の岐阜城へ

#### 7 大手門跡(岐阜城)

現在の妙照寺前から少し西側に、大手道である金華山の七曲登山道の上り口に向かかちで大手門があったとされている。現在は、その面影は全くない。

### 江戸へ献上した熟鮎づくりの拠点

#### 8 御館所跡

江戸時代、江戸幕府に献上するための、鮎の熟鮎をつくる「御館所」が現在の益屋町付近にあった。河崎吾衛門家が御館屋(後に御館元と改称)発掘調査では、竈なども見つかったことが、現在は民家となり、広い敷地だった御館所の面影は見られない。

### 道三の菩提寺

#### 9 常在寺

開山は宝徳2年(1450)、土岐家守護代齋藤妙椿が、妙覚寺から世尊院日範を招いて建立したとされ(日蓮宗京都妙覚寺の末寺になる)、文殊菩薩が安置されている。正式名称は、鷲林山常在寺という。齋藤道三から三代にわたる菩提寺だったため、この道三と息子の義隆の画像(国重要文化財)を所蔵している。道三は後に土岐氏をも滅ぼして美濃国主になり、常在寺に寺領を与えて保護した。道三は、京都の妙覚寺の宗徒であったが、環俗して油売りの松波庄九郎として美濃に来て、常在寺を拠点に美濃国主になったと伝えられている。しかし最近の調査により、「国盗り」は、道三一代だけで成されたわけでは無いらしいことが解明されつつある。

### 芭蕉が泊まった寺

#### 10 妙照寺

梶川町にある妙照寺の創建は、天文3年(1534)で、本堂は寛文2年(1662)に建てられた。慶長5年(1600)、当時の岐阜城主の織田秀信から、竹中半兵衛(豊田秀吉の家臣)の屋敷跡を寄進され、現在の位置に移された。この寺の庫裡は岐阜県内に現存している神社・仏閣の中で最古のもので、本堂も庫裡も岐阜市指定重要文化財である。貞享年間、当時この寺の僧で後にこの寺の住職となる己百が、旅で京都にいた芭蕉を訪ね入門し、この寺に松尾芭蕉を招いた。芭蕉が実際にこの寺を訪れたのは元禄元年(1688)6月で、奥書院に約1ヶ月間に亘り長期滞在した。その座敷は今も現存し、挨拶句として「やどせむあかさの垣となる日まじ」と詠み、この寺にこの句碑もある。また、己百の墓もある。この寺の池は、信長が岐阜町建設の際に、土塁用の土を掘り取った跡だとされる。

### 独特の建築様式と日本一の乾漆大仏

#### 11 岐阜大仏(正法寺)

正法寺の大仏は、像高13.63m、顔の長さは3.6m。奈良、鎌倉の大仏と並び、日本3大仏の一つとされる。38年かけて天保3年(1832)に完成した。この大仏の作り方は珍しいもので、木・竹・粘土で型を作り、それに和紙(経典が書かれている)を貼り、金箔で仕上げている。そのため、「龍大仏」と呼ばれている。この技法でつくった大仏としては日本一の大きさである。また、大仏の胎内には木道の薬師如来像が安置されている。

### 何のためのガタガタ？

#### 12 鋸型の家並み

通りに対して家屋を少しずつ斜に構えてあるのが特徴。そのため、鋸型の家並みになる。岐阜市ではあまり見られないが、家屋自体は別の地域から移築されたという説もある。

### 歴史の玉手箱

#### 13 岐阜市歴史博物館

昭和60年(1985)11月開館。平成17年(2005)3月、歴史を体験・体感するというコンセプトでリニューアルした。その目玉の一つは、原始から近代に至るまで歴史の面白さを体験できる場を備えたこと。特に、「関国ワンダーランド」では、織田信長が活躍した戦国時代の岐阜の町並みを再現した「築市立体絵巻」で、貝ごまや双穴といった音の遊びが体験でき、当時の各種着物を試着でき、時代に浸れる。「天下鳥獣絵巻」では、信長の天下布武の気持ちを体感できる。また、市民の通年型ボランティア活動を導入し、その協働により体験・体感コーナーが活かされている。

### 信長、一豊、退助が待つ。岐阜市に来たらこゝへ。

#### 14 岐阜公園

明治22年(1888)開園。金華山、長良川に抱かれ、市民や観光客の憩いの場として親しまれている。かつては、図書館、科学館、動物園、水族館などがあつた。金華山頂・岐阜城に行くには何本かの登山道とロープウェーもある。信長の居館跡、冠木山、山内一豊と千代婚礼の地モニュメント、加藤兼一・栄三美術館、若き日の信長像、板垣退助像、明治天皇聖像、菊花展、三重の塔など見所が多く、加えて平成13年(2001)には、「信長の庭」が完成した。

### 岐阜城落城・女中の無念

#### 15 御手洗池

金華山々麓、岐阜公園内の北側に位置する。元々は長良川の淵だった。かつては、この池の背後にあたる金華山丸山に伊奈波神社があつたため、この池で手を洗って参拝した。それがこの池の名の由来とされる。伊奈波神社は、天文8年(1539)に齋藤道三が稲葉山に居城するにあたり、現在の場所(伊奈波通)に遷されたこととされる。慶長5年(1600)、関ヶ原合戦の際、当時の岐阜城主織田秀信(信長の孫)は西軍の石田三成に加担したことにより、東軍の福島正則・池田輝政から猛攻を浴びて落城した。その時、大勢の奥女中らがこの池に投身したといわれる。

### 齋藤道三の心づかい？

#### 16 丸山

伊奈波神社が最初に鎮守されたのが、金華山の丸山である。下には御手洗池があり、参拝者はそこで手を洗ったという。天文8年(1539)に、齋藤道三が稲葉山城(後の岐阜城)に入城した際、「神様が定下になってしまったこと」を申し訳ないと、現在の位置に伊奈波神社を移したとされる。この場所には現在は何も残されていないが、若干の平地があり、当時をしのぶことができる。

### 戦国の火を受けた物

#### 17 戦国時代の甍

加藤兼一・栄三記念美術館の入り口付近にある甍は、戦国時代に使われていたものである。

### 日本の宮殿

#### 18 織田信長公居館跡

宣教師ルイス・フロイス(1532年リスボン生まれ、1569年信長に会う、1583年にヴァリニャーノ巡察使から「日本史」の編纂・執筆を命じられる、1597年長崎で没する)が岐阜を訪れ信長にこの居館に招かれた際、「広間の第一の廊下から、すべて絵画と塗金した屏風で飾られた約20の部屋に入る」などと、その壮麗さを記している。巨石を積み上げた道路や石垣は、普通に見えるが、信長の時代には珍しいもので、新しいものが好きな信長の性格もうかがわれる。この他に、土塁(土塁=防衛用の土手)状の遺構、階段・水路・建築物の礎石の一部などが保存整備されている。建物は全く無く、復元もされていないが、当時をしのぶことができる。

### 天然林の山肌と長良川のスペクタクル、金華山頂へ

#### 19 金華山ロープウェー

昭和30年(1955)に開業。山麓駅から山頂駅まで、高低差255m、距離599m(最急勾配32°42')を約3分(速度は約13km)で登っていきます。ゴンドラからの長良川の眺めもすばらしい。ゴンドラは46人乗り、平日は、15分に1本、日祝日は10分に1本の運行。

### 本当の美濃の頂点

#### 20 金華山

金華山は、岐阜市の中心部に位置し、標高は329m。かつては稲葉山と呼ばれ、山頂には岐阜城がそびえ立つ。岐阜城最上階からの眺めは、かつて織田信長も見晴した壮大なスケール。東に恵壽館、科学館、動物園、水族館などがあつた。日本アルプス、西に伊吹、養老、鈴鹿山系が連なり、南には濃尾平野など大パノラマが広がる。また市の中心部にありながら、シイの原生林やシラカバの群生が茂り、シジューカラ、ヤマガラ、メジロなど60種類以上の鳥たちも生息。トツバ、モチツツジなどの草花に出会うこともでき、まさに自然の博物館さながらである。ロープウェー山頂駅前にはリス村もあり、愛らしくかわいいたくさんのリスたちが待っている。

### どう攻め落とす？

#### 21 岐阜城

建仁年間(1201~1204)、鎌倉幕府執事の二階堂行成が最初にここに砦を築いたとされる。その後、美濃の守護土岐氏の筆頭家臣齋藤氏が居城とするものの、下克上により齋藤道三の手に、1567年には道三の孫である龍興を倒した織田信長が城を手に入れた。この地方一帯を平定。名をそれまでの稲葉山城から岐阜城へ改名し、後に安土城が建設されるまでの10年ほどの間、天下統一の拠点とした。しかし慶長5年(1600)、関ヶ原の合戦の前哨戦で、信長の孫、秀信が西軍に味方したため東軍に攻め入れられ落城。翌年岐阜城は廃城となり天守閣、櫓などの一部は加納城に移されたとされる。

### いざ、山頂の岐阜城へ

#### 22 七曲登山道(大手道)

齋藤道三が岐阜城に入城した際、金華山の西麓に居館を建て、百曲通と七曲通に城下町をつくったとされる。秀信の時の落城の際には、大垣城・犬山城に救援を頼み、七曲口には木道具具康父子、御殿・百曲口は百々網家らを配置して城を守ろうとしたが及ばなかった。

### 尾張藩主の御成

#### ● 岐阜町本陣跡

米屋町辺りに岐阜町の本陣があつた。岐阜町は尾張藩であつたが、関ヶ原の合戦の前哨戦での岐阜城落城を記念し、後年尾張藩主が岐阜町に来るのにあたり、質屋邸に本陣が設けられたといわれる。岐阜御成と呼ばれていた。尾張藩の歴代藩主は、必ず一度は岐阜を訪れ、ここを定宿とした。徳川宗春は、享保18年(1733)に岐阜を訪れ、鶺鴒を見物したり、お忍びで伊奈波神社の門前の茶屋へ行ったりしたという。